

申告書確認表【留意事項】

この申告書確認表【留意事項】は、申告書確認表を御活用いただく際に留意すべき事項について取りまとめたものです。

項 目	確 認 内 容		留 意 事 項
	No.		
共通事項	1	当連結事業年度に適用される別表を使用していますか。	当連結事業年度に対応した別表を使用していない場合には、税制改正に伴う改正事項が反映されないなど、連結所得金額や税額の計算に誤りが生じることがあります。
	2	各別表に記載している前連結事業年度からの繰越額（期首現在連結個別利益積立金額、期首現在連結個別資本金等の額を含みます。）は、前連結事業年度の個別帰属額の届出書の金額と一致していますか。	前連結事業年度からの繰越額が前連結事業年度の個別帰属額の届出書の内容と一致していない場合には、その繰越額に基づいて算出した連結所得金額や税額の計算に誤りが生じることがあります。 なお、別表五の二(一)付表一の期首現在連結個別利益積立金額や期首現在連結個別資本金等の額が前連結事業年度の個別帰属額の届出書の内容と一致していない場合には、前連結事業年度に税務上加算した項目の減算漏れ、連結特定同族会社の課税連結留保金額、寄附金の損金不算入額等の計算に誤りが生じることがあります。
	3	組織再編成がある場合、組織再編成に係る契約書等の写し及び主要な事項に関する明細書を添付し、適格判定を行っていますか。	適格判定に誤りがあつた場合には、移転資産等に係る多額の譲渡損益等の申告調整が必要となる場合があります。
個別帰属額の届出書	4	1 欄の金額は、別表七の二付表一の24欄に金額を記載した場合、別表四の二付表の55①欄の金額を中段の(イ)に記載し、別表七の二付表一の24欄の金額を下段の(ロ)に記載し、(イ)の金額と(ロ)の金額を合計した金額を上段に記載していますか。	左記の金額を記載していない場合には、上段の個別所得金額の計算に誤りが生じることがあります。
	5	37 欄の金額は、連結法人税の個別帰属額の届出書付表の4 欄と一致していますか。	左記の金額が一致していない場合には、連結地方法人税個別帰属額に誤りが生じることがあります。
個別所得金額の計算 別表四の二付表・ 五の二(一) 付表一	6	別表四の二付表の1 ③欄の配当の額は、株主資本等変動計算書記載の剰余金の配当の額と一致していますか。	左記の金額が一致していない場合には、連結特定同族会社の課税連結留保金額の計算に誤りが生じることがあります。
	7	別表四の二付表と別表五の二(一)付表一の検算額は、別表五の二(一)付表一の25④欄の金額と一致していますか。 【検算式】 ○連結親法人 〈納付の場合〉 別表四の二付表の55②欄 + 別表五の二(一)付表一の25①欄 + 別表五の二(一)付表一の21～24の③欄の合計額 - 別表五の二(一)の16③確定欄 - 別表一の二(一)の15欄 - 別表一の二(一)の42欄 = 別表五の二(一)付表一の25④欄 〈還付の場合〉 別表四の二付表の55②欄 + 別表五の二(一)付表一の25①欄 + 別表五の二(一)付表一の21～24の③欄の合計額 - 別表五の二(一)の16③確定欄 + 別表一の二(一)の27欄 + 別表一の二(一)の43欄 = 別表五の二(一)付表一の25④欄 ○連結子法人 別表四の二付表の55②欄 + 別表五の二(一)付表一の25①欄 + 別表五の二(一)付表一の21～24の③欄の合計額 = 別表五の二(一)付表一の25④欄	中間納付額の還付金がある場合、適格合併等により移転を受けた資産等がある場合には、一致しないことがあります。 なお、連結親法人にあっては、別表五の二(一)付表一に記載する「未収連結法人税個別帰属支払額及び未収連結地方法人税個別帰属支払額」から「未払連結法人税個別帰属受取額及び未払連結地方法人税個別帰属受取額」を減算した額と「未納連結法人税及び未納連結地方法人税」との間に差額がある場合にも、一致しないこととなります。
	8	前連結事業年度以前に所得金額に加算した有価証券若しくはゴルフ会員権等の評価損又は減損損失の額について、当連結事業年度に売却等の減算事由が生じたものを減算していますか。	左記の項目以外に、前連結事業年度以前に申告調整を行っている項目についても、その受入処理が正しく行われているか併せて確認する必要があります。

申告書確認表【留意事項】

項 目	No.	確 認 内 容	留 意 事 項
個別所得金額の計算 別表四の二付表・ 五の二(一) 付表一	9	貸借対照表の任意引当金、繰延税金資産（負債）等の金額は、別表五の二(一)付表一の④欄の金額と一致していますか。	No.9・No.10によっていない場合には、申告調整が正しく行われていない可能性があります、その結果、連結所得金額の計算に誤りが生じることがあります。
	10	貸借対照表又は勘定科目の内訳明細書に記載している連結法人税個別帰属額の未払又は未収分の金額は、別表五の二(一)付表一の④欄に記載した連結法人税個別帰属額の未払金又は未収入金の金額と一致していますか。	
	11	組織再編成がある場合、連結個別利益積立金額及び連結個別資本金等の額の調整を行っていますか。	
帳簿価額修正 別表五の二(一) 付表二	12	2 欄に最終利益積立金額を記載していますか。	No.12・No.13によっていない場合には、帳簿価額修正額の計算に誤りが生じることがあります。
	13	組織再編成（適格合併又は適格分割型分割）がある場合、13欄～17欄において最終利益積立金額の調整計算を行っていますか。	
租税公課 別表五の二(二) 付表	14	5、10、15及び24～29の⑤欄でプラス表示している金額を別表四の二付表の14欄、17欄及び19欄で加算していますか。	No.14～No.19によっていない場合には、租税公課に係る申告調整が正しく行われていない可能性があります、その結果、連結所得金額の計算に誤りが生じることがあります。
	15	5 欄、10欄及び15欄でマイナス表示している還付法人税等又は還付所得税等（いずれも還付加算金を除きます。）の額で、雑収入等に計上しているものを別表四の二付表の24欄又は25欄で減算していますか。	
	16	19の③欄及び④欄でプラス表示している事業税の額を別表四の二付表の23欄等で減算していますか。 また、19の③欄及び④欄でマイナス表示している還付事業税の額を別表四の二付表で加算していますか。	
	17	「その他」の③欄に表示している充当金の取崩し又は④欄に表示している仮払経理により納付した源泉所得税の額又は外国法人税等の額を別表四の二付表で減算していますか。	
	18	仮払経理により納付した税額の合計額及び41欄の金額は、それぞれ貸借対照表又は勘定科目内訳明細書の記載額と一致していますか。	
	19	44の②中間欄及び確定欄の合計額は、個別帰属額の届出書の14欄及び37欄の合計額と一致していますか。	
外国税額控除 別表六の二(二) 付表等	20	国外事業所等を通じて事業を行っている場合には、連結国外所得金額の計算において、国外事業所等帰属所得とそれ以外の国外源泉所得とに区分して計算していますか。 また、国外事業所等帰属所得の計算に当たっては、別表六(二)付表一等を作成していますか。	平成26年度税制改正により、帰属主義が導入されたことに伴い、連結国外所得金額の計算は、国外事業所等帰属所得とそれ以外の国外源泉所得とに区分して計算することとされました。
	21	別表六の二(二)付表の19欄及び別表六(二)付表一の5 欄の金額は、税引後の金額としていますか。 また、これらの金額に係る計算の明細を記載した書類を添付していますか。	税引後の金額としていない場合には、連結国外所得金額が過大となる可能性があります、その結果、外国税額の控除額が過大となる可能性があります。

申告書確認表【留意事項】

項目	No.	確認内容	留意事項
外国税額控除 別表六の二(二) 付表等	22	別表六の二(二)付表の6欄の金額は、国外事業所等帰属所得及びそれ以外の国外源泉所得ごとに計算した非課税所得分の合計額（マイナスの場合は0）を記載していますか。	平成26年度税制改正により、帰属主義が導入されたことに伴い、連結国外所得金額の計算は、国外事業所等帰属所得とそれ以外の国外源泉所得とに区分して計算することとされました。
	23	国外事業所等帰属所得及びそれ以外の国外源泉所得ごとに、共通費用及び共通利子の配賦計算をしていますか。	
	24	連結国外所得金額の計算において、別表四の二付表の加減算額を調整していますか。 （例）別表八(二)の外国子会社配当等に係る益金不算入額、別表十七(三)の特定外国子会社等に係る個別課税対象金額（本店所在地国、支店所在地国等において外国法人税を課されないものを除きます。）	
外国税額控除 別表六(三)	25	12～29の②欄及び⑤欄の金額は、最も古い連結事業年度のものから順に充当していますか。 また、同一連結事業年度のものについては、国税、道府県民税、市町村民税の順に充当していますか。	充当の順序に誤りがあった場合には、外国税額の控除額の計算に誤りが生じることがあります。
外国税額控除 別表六(四)・ 六(四の二)・ 六(五)	26	外国法人税に該当しない税（中国の増値税等）を記載していませんか。	法人の所得を課税標準として課される税ではない中国の増値税等は外国法人税に該当せず、外国税額控除の対象となりません。 また、法人の所得を課税標準として課される税であっても、税を納付する者がその納付後、任意にその金額の全部又は一部の還付を請求することができる税等、法令第141条第3項各号に掲げる税についても外国法人税に該当せず、外国税額控除の対象となりません。
	27	益金不算入の対象となる外国子会社から受ける剰余金の配当等の額に係る外国源泉税等を、別表六(四)に記載していませんか。 また、法第23条の2第2項第1号の規定の適用を受ける剰余金の配当等の額（同条第3項の規定の適用を受けるものを含みます。）に係る外国源泉税等について、別表六(四の二)を作成していますか。	外国子会社配当益金不算入の対象となる剰余金の配当等に係る外国源泉税等は、当該配当等の額のうち法第23条の2第2項の規定の適用を受ける部分の金額に係るものを除き、外国税額控除の対象となりません。
	28	別表六(四)の4欄、別表六(四の二)の5欄及び別表六(五)の3欄は、当連結事業年度中の日付となっていますか。	外国税額控除の適用時期については、原則として、外国法人税を納付することとなる日の属する連結事業年度において適用することとなりますが、継続適用を条件に、その納付することが確定した外国法人税額を費用として計上した日の属する連結事業年度において外国税額控除を適用することもできます。 なお、これは、適用年度を任意に選択できるというものではなく、その費用計上時期が税務上も認められる合理的な基準による必要があります。
	29	別表六(四)の8欄、別表六(四の二)の7欄及び別表六(五)の5欄は、租税条約の限度税率を超えていませんか。	租税条約の限度税率を超えている部分については、外国税額控除の対象にならず、損金の額に算入されることとなります。
	30	別表六(四)の12欄、別表六(四の二)の9欄及び別表六(五)の7欄に、租税条約及び相手国法令の根拠規定を記載していますか。	みなし外国税額控除は、租税条約において、外国法人税を納付したとみなされる旨を取り決めた国及び税目に限って適用されることから、当連結事業年度における適用関係を租税条約により確認する必要があります。
試験研究費に係る 法人税額の特別控除 別表六の二(三)付表 六の二(五)付表	31	別表六の二(三)付表の1欄及び別表六の二(五)付表の1欄の金額は、申告調整額を加減算した税務上の金額となっていますか。 また、試験研究費に充当する目的で他の者から支払を受けた金額がある場合、その金額を試験研究費の額から控除していますか。	試験研究費に充当する目的で他の者から支払を受けた金額がある場合において、その支払を受けた金額がその試験研究費の額を上回っていたときは、その上回った金額は、他の試験研究費の額から控除することとなります。

申告書確認表【留意事項】

項目	確認内容		留意事項	
	No.			
繰越連結欠損金 別表七の二付表二	32	最初連結事業年度の場合、連結親法人の繰越欠損金の額を連結欠損金額として1欄に記載していますか。	最初連結事業年度において、連結欠損金額とみなされるものは、連結親法人の繰越欠損金の額、株式移転により連結親法人を設立した一定の連結子法人のうち一定の繰越欠損金の額及び特定連結欠損金額となるものに限られます。	
	33	1欄又は4欄の金額は、連結欠損金額とみなされるものですか。		
	34	特定連結子法人の最初連結事業年度の開始の日（加入日）の属する連結親法人の連結事業年度開始の日以後に開始したその特定連結子法人の連結加入前の事業年度において生じた欠損金の額を、その加入日の属する連結事業年度に生じた連結欠損金額としていませんか。		左記の欠損金の額は、加入日の属する連結事業年度の前連結事業年度において生じた連結欠損金額とみなすこととなります。
	35	組織再編成がある場合に7欄～20欄において連結欠損金個別帰属額の調整計算を行っていますか。		7欄～20欄において連結欠損金個別帰属額の調整計算を行っていない場合には、連結欠損金の損金算入額の計算に誤りが生じることがあります。
外国子会社から受ける 配当等の益金不算入 別表八(二)	36	5欄又は6欄は、25%（租税条約で別途定めのある場合はその割合）以上となっていますか。	保有割合の判定に当たっては、自己株式を除いて判定することとなります。	
	37	7欄は、当連結事業年度中の日付となっていますか。		
	38	8欄は、6月以上の期間となっていますか。		
	39	27欄の金額を別表四の二付表で加算していますか。		
	40	経過措置により、平成28年4月1日において保有する外国子会社の株式又は出資（同日において外国子会社に該当する外国法人の株式又は出資に限ります。）に係る剰余金の配当等の額を受ける場合には、12欄～17欄への記載は不要であるにもかかわらず、記載していませんか。		
取用換地等の連結所得の特別控除及び圧縮記帳 別表十の二(二)・十三(四)	41	各別表の5欄の金額に収益補償金又は経費補償金等の対価補償金としない金額を含めていませんか。	収益補償金又は経費補償金等については、原則として、連結所得の特別控除及び圧縮記帳の対象となる対価補償金に該当しませんが、次のような補償金については、連結所得の特別控除及び圧縮記帳の対象とされる対価補償金として取り扱うことができる場合があります。 ① 建物の対価補償金が取用等をされた建物の再取得価額に満たないため、収益補償金のうち建物の対価補償金として計算した金額 ② 取用等に伴い事業の全てを廃止した場合等で、かつ、他に転用できない機械装置等がある場合のその売却損の補償金 ③ 土地等の取用に伴い、その上に存する建物等を取り壊した場合のひき家又は移築の補償金 ④ 土地等又は建物等の取用等に伴い、移設困難な機械装置を取り壊した場合の移設補償金 ⑤ 建物の取用等に伴い、その使用を継続することが困難となったため、借家人が転居先の建物の賃借に要する権利金に充てるものとして交付される借家人補償金	

申告書確認表【留意事項】

項目	確認内容		留意事項
	No.		
取用換地等の連結所得の特別控除及び圧縮記帳 別表十の二(二)・十三(四)	42	別表十の二(二)の3欄は、2欄に記載した日以後6月以内の日付となっていますか。	公共事業者から最初に取り等申出を受けた日から6月以内(土地収用法第46条の2第1項の規定等により補償金の支払請求をした場合等については、別途期間が設けられています。)に譲渡されなかった資産については、代替資産についての圧縮記帳の適用を受けることができますが、連結所得の特別控除の適用を受けることはできません。 また、次の資産についても、同様に代替資産についての圧縮記帳の適用を受けることができますが、連結所得の特別控除の適用を受けることはできません。 ① 一の取用換地等に係る事業につき、取用換地等による資産の譲渡が2年以上にわたって分割して行われた場合における最初に譲渡があった年において譲渡された資産以外の資産 ② 最初に取り等申出を受けた者以外の法人(一定の場合を除きます。)から譲渡された資産
	43	建物を取り壊して土地を譲渡している場合、別表十の二(二)の10欄及び十三(四)の8欄の金額にその建物の帳簿価額、取壊費用の額等を含めていますか。	建物を取り壊して土地を譲渡している場合の建物の帳簿価額等は譲渡経費に該当することから、これらを含めていなかった場合には、連結所得の特別控除額や圧縮限度額の計算に誤りが生じることがあります(建物の廃材等の売却代金は、譲渡経費から控除することとなります。)。 なお、この場合の建物の帳簿価額は、会計上の帳簿価額ではなく、税務上の帳簿価額となります。
	44	同一連結事業年度内の同一の年に属する期間において、連結所得の特別控除と圧縮記帳(特別勘定を設けた場合を含みます。)を重複適用していませんか。	同一連結事業年度内の同一の暦年に属する期間に取用換地等があった場合において、連結所得の特別控除と圧縮記帳との重複適用を行うことはできませんが、同一連結事業年度内の異なる暦年において取用換地等があった場合には、それぞれの暦年ごとに連結所得の特別控除と圧縮記帳との選択適用ができます。
	45	取用に係る連結所得の特別控除制度の適用を受ける場合、同一暦年での特別控除額の合計額が5,000万円を超えていませんか(別表十の二(二)の16欄～18欄)。	同一暦年での連結所得の特別控除額の限度額は5,000万円となりますが、同一連結事業年度内の異なる暦年において取用換地等があった場合には、それぞれの暦年ごとに5,000万円を限度とすることができるため、その連結事業年度における連結所得の特別控除額が5,000万円を超えることもあります。
	特定資産の買換えの特例 別表十三(五)	46	適用を受けようとする譲渡資産及び買換資産は、措法第68条の78第1項各号の要件を満たしていますか。
47		建物を取り壊して土地を譲渡している場合、8欄の金額にその建物の帳簿価額、取壊費用の額等を含めていますか。	建物を取り壊して土地を譲渡している場合の建物の帳簿価額等は譲渡経費に該当することから、これらを含めていなかった場合には、圧縮限度額の計算に誤りが生じることがあります(建物の廃材等の売却代金は、譲渡経費から控除することとなります。)。 なお、この場合の建物の帳簿価額は、会計上の帳簿価額ではなく、税務上の帳簿価額となります。
48		買換資産が措法第68条の78第1項第7号下欄の土地等である場合、その面積は300㎡以上となっていますか(特定施設の敷地又は駐車場の用に供されるもののみが対象となります。)。)	面積要件を満たさない場合には、特定資産の買換えの特例の適用を受けることはできません。 なお、特定施設の敷地又は駐車場の用に供されるものであるかの判定は、買換資産である土地等を取得した時において、現に特定施設の敷地等の用に供されているか、又は供されることが確実であると認められるかによって行うこととなります。

申告書確認表【留意事項】

項目	No.	確認内容	留意事項
特定資産の買換えの特例 別表十三(五)	49	買換資産が土地等の場合、19欄には18欄のうち4欄の5倍（平成29年4月1日以前に行った譲渡に係る資産が旧措法第68条の78第1項第2号上欄に掲げる譲渡資産である場合は10倍）を超える部分の面積を記載していますか。 また、その明細を別紙に記載して添付していますか。	取得した土地等のうち、譲渡資産である土地等の面積の5倍（平成29年4月1日以前に行った譲渡に係る資産が特定の農地である場合は10倍）を超える部分については、買換資産とすることはできません。
	50	27欄の金額を算出する際に乗じた割合を0.8としていますか（平成27年8月10日以後に行った地域再生法第5条第4項第5号に規定する「集中地域」以外の地域から「集中地域」等への買換えについては、買換資産が東京23区内にある場合の割合は0.7、それ以外の場合は0.75となります。また、震災特例法第27条から第29条までの適用を受ける場合の割合は1.0となります。）。	圧縮限度額の計算は、圧縮基礎取得価額に差益割合及び一定の縮減率を乗じて計算することとされ、圧縮基礎取得価額は、買換資産の取得価額と譲渡に係る対価のうち買換資産の取得に充てられた額とのいずれか少ない金額とされています。 また、同一連結事業年度において、買換資産が2以上ある場合の譲渡対価の額は、これらの資産のうちの一の買換資産の取得価額に達するまでその取得に充てられたものとし、次に、その残額について、他の買換資産の取得価額に達するまで順次充てられたものとして計算することとなります。
完全支配関係がある 法人間取引の損益調整 別表十四(五)	51	5欄の金額は、1,000万円以上の金額を記載していますか。	譲渡原価の額とは、譲渡損益調整資産の譲渡直前の帳簿価額をいい、例えば、不動産売買又は有価証券の譲渡に係る手数料など譲渡に付随して発生する費用は、これに含まれないこととなります。
	52	当連結事業年度に譲渡した譲渡損益調整資産が連結完全支配関係がある連結法人の株式である場合には、5欄の金額を帳簿価額修正後の金額としていますか。 また、その場合、別表五の二(一)付表一で帳簿価額修正を行っていますか。	5欄の金額を帳簿価額修正後の金額としていない場合には、譲渡損益の計算に誤りが生じることがあります。
	53	当連結事業年度に譲渡した譲渡損益調整資産が減価償却資産又は繰延資産である場合には、13欄又は16欄に金額を記載していますか。	譲渡損益調整資産が減価償却資産又は繰延資産である場合には、譲渡損益調整額の戻入れ計算について、簡便法を適用することができます。 なお、複数の減価償却資産又は繰延資産を譲渡した場合には、個々の減価償却資産又は繰延資産ごとに簡便法を適用することができます。
	54	譲渡損益調整額の戻入れ計算を譲渡年度において原則法又は簡便法により行った場合、その後の年度もそれぞれ原則法又は簡便法を継続適用していますか。	
交際費等の損金算入額 別表十五の二	55	交際費等に係る控除対象外消費税額等を支出交際費等の額に含めていますか。 また、接待飲食費の額に係る控除対象外消費税額等を21欄に含めていますか。	接待飲食費に係る控除対象外消費税額等については、接待飲食費の額に含まれることとなるため、その金額の50%に相当する金額が損金の額に算入されません。
減価償却費 別表十六(一)・ 十六(二)・ 特別償却の付表	56	平成19年4月1日から平成24年3月31日までに取得した資産、平成24年4月1日から平成28年3月31日までに取得した資産又は平成28年4月1日以後に取得した資産について、それぞれ適用すべき償却方法及び償却率によって計算していますか（平成28年4月1日以後に取得した建物附属設備及び構築物並びに鉱業用減価償却資産のうち建物、建物附属設備及び構築物の償却方法については定率法を選定できません。）。	税制改正により、償却方法及び償却率の見直しが行われることがあるため、償却方法等が法令に適合しているか確認する必要があります。 なお、平成28年度税制改正により、平成28年4月1日以後に取得した建物附属設備等については、定率法を選定できないこととされています。
	57	連結親法人が中小連結親法人又は特定中小連結親法人に該当しない法人であるにもかかわらず、これらに該当しないと適用できない特別償却を適用していませんか。	資本金の額又は出資金の額が1億円以下であっても、大規模法人（資本金の額又は出資金の額が1億円を超える法人等）の子会社である等一定の要件に該当する場合には、中小連結親法人又は特定中小連結親法人に該当しないことがあります。

申告書確認表【留意事項】

項目	確認内容		留意事項
	No.		
減価償却費 別表十六(一)・ 十六(二)・ 特別償却の付表	58	特別償却の適用を受けた資産について、措法による圧縮記帳及び他の特別償却を重複適用していませんか。	特別償却の適用に当たって、法法による圧縮記帳との重複適用をすることはできませんが、措法による圧縮記帳及び他の特別償却との重複適用をすることはできません。 なお、法法による圧縮記帳との重複適用をした場合には、圧縮記帳をした後の金額をその取得価額として特別償却を行うこととなります。
	59	特別償却の制度ごとに適用すべき基準取得価額割合及び償却率によって計算していますか。	税制改正により、特別償却の基準取得価額割合及び償却率の見直しが行われることが多いため、適用を受けようとする基準取得価額割合等が法令に適合しているか確認する必要があります。
特定外国子会社等に 係る課税対象金額等 別表十七(三)等	60	特定外国子会社等を有する場合、別表十七(三)等を添付し、会社単位の合算課税制度に係る適用除外規定の適用の有無について判定を行っていますか（適用除外となる場合であっても、特定外国子会社等の財務諸表、申告書等を添付する必要があります。）。	別表十七(三)を添付していない場合には、会社単位の合算課税制度に係る適用除外規定の適用を受けることはできません。 また、別表十七(三の二)を添付していない場合には、特定所得の合算課税制度に係る適用除外規定の適用を受けることはできません。
	61	別表十七(三)等の各欄は、添付した特定外国子会社等の財務諸表、申告書等の記載内容と一致していますか（会社単位の合算課税制度に係る適用除外規定の適用を受ける場合であっても、適用対象金額があり、特定所得の金額があるときは、別表十七(三の二)を作成していますか。）。	
	62	別表十七(三)の31欄の金額は、6欄の事業年度中に確定した法人所得税の額を記載していますか（6欄の事業年度の所得に対する法人所得税の額を記載していませんか。）。	6欄の事業年度の所得に対する法人所得税の額を記載した場合には、課税対象金額の計算に誤りが生じることがあります。
	63	別表十七(三)の35欄の金額の換算レートは、特定外国子会社等の当事業年度終了の日の翌日から2月を経過する日における電信売買相場の仲値を適用していますか（自社の同日を含む連結事業年度終了の日における電信売買相場の仲値を適用している場合には継続適用していますか。）（措通68の90-14参照）。	自社の同日を含む連結事業年度終了の日における電信売買相場の仲値を継続適用している場合で、2以上の特定外国子会社等を有するときは、その全ての特定外国子会社等につき、当該電信売買相場の仲値を適用する必要があります。
	64	別表十七(三)付表一の25～27の計欄及び合計欄には、間接保有分も含めていますか。	間接保有分とは、外国法人を通じて間接的に保有するものをいい、内国法人を通じて間接的に保有するものは含まれません。
特定外国子会社等に 係る課税対象金額等 別表十七(三の三)・ 十七(三の四)	65	別表十七(三の三)の6欄の金額は、4欄の事業年度の所得に対する外国法人税額ですか。 また、その外国法人税額に係る申告書等を添付していますか。	対象事業年度以外の外国法人税額を記載した場合には、控除対象外国法人税額の計算に誤りが生じることがあります。
	66	別表十七(三の三)の17欄及び18欄の金額の換算レートは、特定外国子会社等の当事業年度終了の日の翌日から2月を経過する日における電信売買相場の仲値を適用していますか（自社の同日を含む連結事業年度終了の日における電信売買相場の仲値によっている場合には継続適用していますか。）（措通68の90-21参照）。	自社の同日を含む連結事業年度終了の日における電信売買相場の仲値を継続適用している場合で、2以上の特定外国子会社等を有するときは、その全ての特定外国子会社等につき、当該電信売買相場の仲値を適用する必要があります。
	67	別表十七(三の四)の5欄は、当連結事業年度中の日付となっていますか。	配当等について、継続してその支払を受けた日（その支払のために通常要する期間内の日に限ります。）の属する連結事業年度の収益としている場合には、前連結事業年度中の日付となることがあります。

申告書確認表【留意事項】

項 目	確 認 内 容		留 意 事 項	
	No.			
国外関連者に関する 明細書 別表十七(四)	68	国外関連者との取引がある場合、取引がある全ての国外関連者の名称、当該国外関連者の直近事業年度の営業収益等及び国外関連者との取引状況等について記載していますか（取引には対価の授受がないものも含まれます。）。	左記の記載がない場合には、移転価格上の問題の有無を正しく判定できず、その結果、所得金額の計算に誤りが生じることがあります。	
P /L B /S ・勘定科目の内訳明細書	評価損等	69	有価証券若しくはゴルフ会員権等の評価損又は減損損失の額のうち、税務上損金の額に算入されない金額を別表四の二付表で加算していますか。	資産の評価損を計上するに当たっては、物損等の事実や法的整理の事実が生じているかを確認する必要があります。
	役員報酬手当等 及び人件費	70	個別帰属額の届出書に添付した役員報酬手当等及び人件費の内訳明細書の「事前確定届出給与」欄に記載された金額は、事前確定届出給与に関する届出書に記載した金額と一致していますか。 また、確定した数の株式又は新株予約権を交付する旨の定めに基づいて支給する給与に係る費用の額として損金の額に算入する金額は、交付決議時価額と一致していますか。	所轄税務署へ届け出た支給額と実際の支給額が異なる場合には、実際の支給額的全額が損金の額に算入されません。
		71	利益連動給与又は業績連動給与の額を損金の額に算入している場合、非同族会社（業績連動給与については、非同族会社の100%子会社である同族会社を含みます。）に該当していますか。	平成29年度税制改正により、同族会社であっても、非同族会社の100%子会社が支給する一定の業績連動給与の額は、損金の額に算入されることとなりました。
		72	役員に対する給与（使用人兼務役員に対する使用人職務分を除きます。）の額のうち、定期同額給与、事前確定届出給与及び利益連動給与（又は業績連動給与）のいずれにも該当しないものの額を別表四の二付表で加算していますか。	他社から出向者を受け入れ、当該出向者が自社で役員となっている場合で一定のときには、自社が他社（出向元法人）へ支出する当該役員に係る給与負担金の支出を自社における当該役員に対する給与の支給として、左記の内容を確認する必要があります。
		73	税務上使用人兼務役員になれない役員（専務取締役、常務取締役、監査役等）に対する給与の額を、「使用人職務分」欄に記載していませんか（その役員に対する給与の額が専務取締役等就任前の使用人職務分に対する給与の額である場合を除きます。）。	左記の役員以外にも、非常勤役員は常時使用人としての職務に従事していないことから、使用人兼務役員になることはできません。
		74	「使用人職務分」欄に金額の記載がある場合、使用人としての職制上の地位（部長、工場長等）を「役職名担当業務」欄に記載していますか。	総務担当取締役、経理担当取締役等のように、特定の部門の職務を統括しているだけでは使用人兼務役員になることはできません。
特別損失 雑損失等	75	損金の額に算入されない租税公課、罰科金等の額を別表四の二付表で加算していますか。	租税公課及び罰科金以外に、裁判手続のうち刑事訴訟手続を経て外国又は外国の地方公共団体により課される罰金又は料料に相当するものについても、別表四の二付表で加算する必要があります。	

申告書確認表【留意事項】

項目	確認内容		留意事項	
	No.			
消費税及び地方消費税の申告書（一般用）・添付書類	資産の譲渡等	76	申告書①欄の金額は、付表2①欄（又は付表2-(2)①D欄）の金額と一致していますか（申告書⑤欄に記載がある場合、返還等対価の額に相当する金額が加算されていますか。）。 なお、特定課税仕入れがある場合、申告書①欄の金額は、特定課税仕入れがある場合の課税標準額等の内訳書①欄の金額と一致していますか（申告書⑤欄に記載がある場合、返還等対価の額に相当する金額が加算されていますか。）。	法人税の申告に当たって、課税売上げに係る申告調整がある場合には、調整した後の金額を記載する必要があります。
		77	付表2⑥欄（又は付表2-(2)⑥D欄）の金額には、有価証券の譲渡対価の5%に相当する金額、土地等の譲渡対価の金額及び受取利息の金額を含めていますか。	非課税売上額に誤りがある場合には、課税売上割合が変動し、控除対象仕入税額の計算に誤りが生じることがあります。
	控除税額	78	課税売上高が5億円超又は課税売上割合が95%未満であるにもかかわらず、課税仕入れに係る消費税額を全額控除していませんか。	個別対応方式を選択した場合には、課税仕入れに係る消費税額を、課税売上げにのみ要するもの、非課税売上げにのみ要するもの並びに課税売上げ及び非課税売上げに共通して要するものに区分する必要があります。
		79	申告書⑥欄は、貸倒れに係る売掛金等（税込額）の6.3/108、4/105又は3/103相当額を記載していますか。 また、不課税又は非課税取引（貸付金等）に係る貸倒れについて控除の対象としていませんか。	貸倒れに係る売掛金等（税込額）の8/108又は5/105相当額を記載した場合（地方消費税額を含めた場合）には、貸倒れに係る税額が過大となり、控除税額の計算に誤りが生じることがあります。
		80	付表2⑨欄は、⑧欄の金額に6.3/108を乗じた金額を記載していますか（又は、付表2-(2)⑨のA欄、B欄、C欄は、⑧のA欄、B欄、C欄の金額に3/103、4/105、6.3/108を乗じた金額を記載していますか。）。	課税仕入れに係る支払対価の額（税込額）の8/108又は5/105相当額を記載した場合（地方消費税額を含めた場合）には、課税仕入れに係る消費税額が過大となり、控除税額の計算に誤りが生じることがあります。
	特定課税仕入れ（リバースチャージ方式）	81	課税売上割合が95%未満であり、かつ、特定課税仕入れ（例えば、国外事業者が行うネット広告の配信等）がある場合、「特定課税仕入れがある場合の課税標準額等の内訳書」を添付し、当該内訳書の③欄に特定課税仕入れに係る支払対価の額を記載していますか。	承認を受けた課税売上割合に準ずる割合が95%以上であっても、課税売上割合が95%未満であり、かつ、特定課税仕入れがある場合には、リバースチャージ方式による申告を行う必要があります。
82		上記の場合、付表2⑩欄は、⑩欄の金額に6.3/100を乗じた金額を記載していますか（又は、付表2-(2)⑩C欄は、⑩C欄の金額に6.3/100を乗じた金額を記載していますか。）。	特定課税仕入れに係る支払対価の額には消費税額等に相当する金額は含まれていませんので、6.3/100を乗じることとなります。	

申告書確認表【留意事項】

項目	確認内容		留意事項	
	No.			
消費税及び地方消費税の申告書（一般用）・添付書類	税額の計算	83	申告書⑩欄及び⑪欄の金額について、それぞれの金額の配賦誤りや、中間申告11回目分の記載漏れはありませんか。	配賦誤り等があった場合には、消費税（又は地方消費税）に係る修正申告と地方消費税（又は消費税）に係る更正の請求が必要となることがあります。
		84	申告書⑰欄又は⑱欄の金額は、それぞれ⑧欄又は⑨欄の金額と一致していますか（付表1を添付する場合、申告書⑰欄又は⑱欄の金額は付表1⑰D欄の金額と、申告書⑲欄又は⑳欄の金額は付表1⑱D欄の金額と一致していますか。）。	申告書⑧欄、⑰欄及び⑲欄については、100円未満を切り捨てる必要はありません。
	個別帰属額の届出書等との関係	85	個別帰属額の届出書の別表四の二付表の加減算項目中、消費税法上課税取引となるものについて、消費税及び地方消費税の申告書において調整を行っていますか。	課税売上割合の計算上、免税取引及び非課税取引についても調整を行う必要があります。
		86	申告書⑳欄の金額は、貸借対照表と個別帰属額の届出書の別表五の二（一）付表一の未払（未収）消費税額等の合計額と一致していますか（各月ごとに申告及び納付している法人の場合には、その合計額に決算月の前月分の納付（還付）税額を調整した金額と一致していますか。）。	個別帰属額の届出書の別表四の二付表の加減算項目中、消費税法上課税取引となるものについて、消費税及び地方消費税の申告書において調整を行った場合には、申告書⑳欄は、その調整額を考慮した金額（貸借対照表と個別帰属額の届出書の別表五の二（一）付表一の未払（未収）消費税額等の合計額）と一致することとなります。
		87	課税仕入れに係る消費税額が全額控除できず、資産に係る控除対象外消費税額等を損金に算入している場合、個別帰属額の届出書に別表十六（十）を添付していますか。また、課税売上割合が80%未満である場合、繰延消費税額等の損金算入限度額の計算をしていますか。	個別帰属額の届出書の別表十六（十）の各欄の消費税額等は、消費税額と地方消費税額との合計額を記載する必要があります。

- 1 表中の法令・通達は、以下の略語を用いています。
- 法法 …………… 法人税法
 法令 …………… 法人税法施行令
 措法 …………… 租税特別措置法
 措通 …………… 租税特別措置法関係通達（連結納税編）
 震災特例法 …………… 東日本大震災の被災者等に係る国税関係法律の臨時特例に関する法律
- 2 平成29年6月30日現在の法令・通達によっています。